
死刑囚子育てプロジェクト

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死刑囚子育てプロジェクト

【Nコード】

N3188Z

【作者名】

暁

【あらすじ】

とある刑務所内では、死刑囚を使ったプロジェクトがおこなわれていた。このプロジェクトの先に待つのは、絶望か希望か…。

1話 前編（前書き）

このサイト&ネット連載初挑戦です。誤字脱字ありましたら、ごめんなさい。

1話 前編

10月1日 とある刑務所内会議室

『死刑囚 060号 柿島 かきしま 要人 かなと。生い立ちや過去は一切不明のホームレス。確認できるだけでも31人を殺害』

プロジェクト参加メンバーは、手元の資料を読んでいく。

「梨東 なとう、本当にこんな奴に子育てができるのか？」

「彼が育てる柚木 ゆずぎリサちゃんには色々と問題がありますしね…」

「まあ、やってみようよ。いつちゃん？」

「桃谷 ももたに！いつちゃんて言うな！私は苺島 いちじまだ！」

苺谷は桃屋に掴み掛る。

「060号を連れて来るので、落ち着いて下さい！」

とある刑務所内 特別プロジェクト参加死刑囚収容独房

薄暗くジメジメしている通路を歩き、060号が収容されている独房についた。とても分厚い扉を開け中に入ると、暗闇の中に拘束された060号を見つける。

何もここまで拘束しなくてもいいのでは？と、疑問が頭に浮かぶ。

「…… あつ、今拘束を解きますね」

僕は頭に被せられた袋を取り、目隠しと猿轡 さるぐつわを解く。

「大丈夫ですか？」

「… 医者か？」

「白衣を着ていますが、医者ではありません。犯罪心理学者の梨東 かすたき 一多喜です。拘束具、全部解いてしまいますね」

060号の足枷と全身の拘束具も外していく。

「外してもいいのか？」

「逃げようとしても無駄ですよ。逃げたらあなたの首輪が爆発しますからね」

「それは分かっている。俺に何をするか聞いているんだ？」

「あなたは特別プロジェクトに選ばれたんです」

「プロジェクト？…ああ、死刑囚に薬物投与の人体実験をしたり、女死刑囚に子供を産ませて、人殺しの子供は人殺しになるか調べたりする、あの狂ったプロジェクトか」

「あなたがするのはそんな事じゃありません。あなたがするのは、あなたが殺した人の子供を育てる事です」

「はあ！？」

1話 前編（後書き）

またキャラの名前間違えたので、直しました。

1話 中編（前書き）

前回途中になってすみませんでした。

グロテスクと書きましたが、グロテスクになるのはもう少し後です。
では、続きをどうぞ。

1話 中編

「このプロジェクトはの意味は、殺人鬼でも更生できるかなんです」
「……」

ガシャンという音と共に、060号拘束具が完全に外れた。体を自由に動かせるようになった060号は、ストレッチしながら考え事をする。

「俺はここから出られないしな。やってやるよ。そのプロジェクト」

「そうですか。まあ、断つても無理矢理参加させるんですけどね…。
とにかく、これを飲んでください」

梨東は持っていた鞆の中から水筒を取出し、その中身を白衣のポケットに入っていた、折り畳み式の紙コップに注ぐ。そして、その中身は……尿にしか見えない物だった。

「これって……」

「おしっこじゃないです！あなたをより安全に移動させるための睡眠薬です！」

「いや……それを言うとか飲みにくいんだけど……」

「あつ……と、とにかく！飲んでください！」

「……」

嫌そうな顔をする060号に、梨東は尿にしか見えない睡眠薬を強気に押し付ける。

「飲めばいいんだろ！」

060号は、なかばヤケクソで睡眠薬を飲み干す。その瞬間、060号は足から崩れ落ちた。

よし、ちゃんと息はしているな。あの人が作った睡眠薬だから、少し不安だったけど……。とにかく連絡しよう。

梨東は無線機でどこかに連絡する。

「梨東です。060号眠りました。手術室に運びます」

………何かも失ってしまった……。空腹で力が出ない……。もう………何日普通の飯を食っていないだろう……。ゴミ箱の残飯を漁る気力もない……。後は死を待つのみか……。

××が死を覚悟した時、上から食べ物而降ってきた。××はそれを貪りながら食べる。

「かわいそうに……お腹が空いていたんだね」

「お前は……」

上を見上げると、××と同じ年ぐらいの人物が立っていた。

「××君……だよね？」

「何の用だ」

「君にいい物を持って来たんだ」

謎の人物は、持っていた鞆の中から、戸籍謄本「せきとうほん」を出した。

「これって……」

「死んじやった君の新しい戸籍だよ」

「でも」

「買い取ったんだ。ある自殺志願者から。このままこの人が戸籍上死んだ事になったら、もつたいないじゃん」

「もつたいない？」

「君は戸籍上死んだ事になっている。でも……もう1度生きたいでしょ？ 別の人になっても」

「……」

何も言い返せない××を満足そうに見つめながら、謎の人物ははなしを続ける。

「君がこの顔に整形して、新しく、××××じゃなく、柿島 要人として生きるんだ。……その代わり、君に頼みたいことがある……」

ピピピピピピピピピ。

何か鳴ってる…時計？俺は手探りで時計を探し、アラームを止める。
……懐かしい夢を見た。あいつの名前…何て言ったっけ？……ダメだ。思い出せない。

『ハーロー！060号くん』

「おわっ！」

頭の中で声が聞こえる。

『ボクは桃谷 やなぎ。このプロジェクトの一員さ』

「状況を説明しろ！」

『簡単に言えば、君の脳の中に特殊なチップを埋め込み、目には特殊カメラ付きコンタクトレンズを装着した。チップからは、会話や聞いていることが音声データとして記録され、コンタクトレンズからは、君の今見ているがこちらのモニターに映し出せる。チップは通信機能付き！』

060号はしばらく考えた後、再び喋りだす。

「つまり、全て監視されているって事か」

『そゆこと？そして、その部屋にいる子供を君が育てて、その結果次第で即死刑か減刑か仮釈放が決まるんだ』

「子供？」

部屋を見渡すと、隅っこにぬいぐるみを抱えている子供が、060号を睨んでいた。

『だから、このプロジェクトは『死刑囚子育てプロジェクト』っていうんだよ。わーかーるーかーなー？』

なんでこいつは楽しそうなんだよ……。こっちの気持ちも考えろっつーの。

1話 中編（後書き）

壊れた携帯の未送信メール保存機能を使って、小説の下書きを書いているのですが、携帯の電源が切れたので、今回はここまでになります。

すみません！次でちゃんと1話を終わらせるので、次まで少しお待ちください！

そして、現在、小説タイトルと小説に出てくるキャラ名を募集しています。詳しくは活動報告で確認してください。

1 話 後編（前書き）

ここに何書いたか思い出せない…。
訳が解らない人は、活動報告へ。

1話 後編

…ん？何かへんだ。

頭の違和感に気付いた060号は、部屋に設置してある鏡を見る。

「……髪が短い」

『ボサボサの髪がウザかったから、君が寝ている隙に切ったんだ。手術の時剃ったから、後ろちよつとハゲているけど。嫌だった？』

「…まあいい。他に何のしなかったんだろうな？」

『君、臭かったから寝ている隙に勝手に風呂入れたんだけど、その時チ××触った』

「お前どこ触ってた！」

060号の大声に驚いた柚木は、ベッドの下に隠れてしまう。

『もう、話が先に進まないの、今度は僕が進行します』

『話に入ってこないで』

『警察の方が待ってますよ』

『はあゝい』

ガタツとイスを引く音が聞こえる。どうやら、桃谷はどこかに行つたみたいだ。

『何か聞きたい事がありますか？桃谷さんの事以外で』

「…子供のデータをくれ」

『待ってください』

パラパラとページを捲る音がする。何かの資料を見ているのだろうか？

『えっと、その子は柚木 リサちゃん、5才。あなたに両親を殺されてから、ずっと施設にいましたが、施設が閉園する事になり、リサちゃんはここに来たんです。今言えるのはこれだけです。あと、リサちゃんという時だけ、本名を使ってもいいですよ』

『ちなみにこつちの声は君にしか聞こえないから、リサちゃんから見れば、君は1人で喋っている変な人ゝ！』

『ちょっと！勝手に入ってこないでください！』

『じゃ、通信を切るよ』

『人の話聞いて』

ブツ、ブツ。

…通信ってこんな風にきれるのか。さて、ヒマだし子供と話してみるか。

060号は、ベッドから出てきて部屋の隅で絵本を読んでる柚木に近づき、隣りに座る。

「……柿島 要人だ。その…よろしくな」

「……」

無視かよ…。仕方ねえ、次は…握手でもしてみるか。

060号は、柚木の目の前に手を差し出す。

「……」

バシッ！

「ぬぁ！」

このガキ！俺が出した手を叩きやがった！

「ひっしね。そんなにそとにでたいの？バツカみたい」

柚木は、明らかに060号の事を見下しながら、毒舌を吐く。

「このクソガキー！」

キレイやすい060号のストレスメーターは限界を超え、ブチ切れた060号は、柚木の胸ぐらを掴み上げた。しかし、柚木は顔色1つ変える事なく、冷めた目で060号を見つめる。

『怒っちゃダメです！その子を1回でも殴ると、あなたは即死刑になりますよ！』

「…チッ」

納得のいかない060号は舌打ちをしながらも、渋々柚木を床に下す。

『とにかく、ちゃんと謝ってください』

「……………ゴメン」

「わかればいいのよ」

柚木は絵本を持って、またベッドの下に潜っていった。

「…出てこいよ」

「あんたのかおみたくないのよ」

「わかった、もう勝手にしろ！」

あーイライラする！……仕方ねえ、俺も部屋にある雑誌でも読むか。

同時刻 監視室。

「リサちゃんは060号の事、何も知らないんですよね？」

「相性が悪いんじゃないの？ボクといっちゃんみたいに」

バンッ！

「もーもーたーにー」

勢いよく監視室の扉を開け入ってきたのは、明らかに怒っている苺島だった。

「ウワサをすればなんとやら」

「怒ってるじゃないですか。今度は何を、うわっ！」

2人の間を割って入り苺島がテーブルに置いたのは、数本のアダルトビデオだった。

「私のロッカーにこんなふしだらな物を入れたのはお前だろ！」

「だって、君のロッカー何にも入ってないんだもん。何か面白い物入れておきなよ。」苺島 かなう 叶警視總監

桃谷の言葉に、苺島は顔をしかめる。

「……今はこの刑務所の看守だ」

「そうだったね……」

2人は睨み合う。

「どっちも前途多難ですね」

夜 柚木と060号の部屋。

『リサちゃんと一緒に寝てね？』

「はいはい……。おい、寝るぞ。布団の中に入れ」

「……」

柚木は、060号をジッと見る。

「そこ、寒いだろ。ほら」

060号が布団を捲つてしばらくすると、柚木が布団の中に入ってきた。そして、060号のお腹の上に乗し、すぐ眠りだす。

「…なあ、こいつ重いからどかしてもいいか？」

『ダメ 多分、リサちゃんに君に甘えているんだよ』

「おい！こいつヨダレ垂らしているぞ！」

『いいじゃん、ヨダレくらい。我慢しなよ』

「……今日だけだから」

やがて、060号も眠りについた。

深夜 監視室。

「桃谷さん、これ、飲んでください」

梨東は桃谷にコーヒーを差し出す。

「ありがと」

桃谷がコーヒーを飲んだのを確認して、梨東は桃谷に隣りに座る。

「初日、なんとか終わりましたね。それにしても… 葛島さん、まだ仕事終わらないのかな？」

「気になるの？」

「ち、違いますよ！あつ、きつ、今日のデータ、記録しますね」

「君は本当に解りやすいね」

顔が真っ赤になっている梨東を、桃谷はニヤニヤしながら見つめる。

「そ、そんな事より、何時言っんですか？060号に残された時間が10月31日までって事……」

2話へ続く。

1話 後編（後書き）

060号を坊主にするか悩んだんですが、結局坊主にするのをやめました。そっちのほうが、カッコいいので。

あと、総官の字、間違えていたらすみません。
あつ、苺島の性別は次でわかります。

2話 前編（前書き）

寒い…寒すぎる…。また、途中で止めるかもしれません

2話 前編

10月2日 『死刑囚子育てプロジェクト』2日目。 早朝、柚木と060号の部屋。

「こんな事もうやってられるかー！」

静かな部屋に、060号の大声が響く。柚木は危険を感知して、ベツドの下に潜り込む。

『おい！何があつた！』

突然通信が入ってきた。060号は少し驚きつつ答える。

「お前誰だ？」

『葛島 叶。女だが、私を女扱いしたら打つ潰す！で、何があつた？』

「このクソガキが俺の上で漏らしやがつたんだよ！」

『子供なんだから、お漏らしぐらい当たり前だろ。夜、トイレに連れて行つたのか？』

「……行つてない」

『じゃ、お前が悪い。そのくらいの子供は、夜寝る前にトイレに連れて行くのが常識だ。後で子育ての本を渡すから、それを見てがんばれ』

…通信が切れた。まったく、どうしろつていうんだ…。

「…んしょ」

060号が静かになったため、柚木がベッドから出てきた。そして、柚木は060号をジッと見つめる。

「…なんだよ」

「……ごめんなさい」

「！…まあ、謝るなら許すよ」

「…」

「うおわ！」

何だこいつ！いきなり俺の膝の上に乗ってきやがつた！

「…どうすればいい？」

『とりあえず、頭撫でてみるのはどう？』

何時の間に交代したんだ…？とにかく、俺は桃谷の言う通り、柚木の頭を撫でてみた。

「さわらないで、へんたい」

「！！」

この…クソガキが！

060号は、膝の上の柚木をすごい勢いで投げる。上手い事ベッドの上に着地した柚木は、状況が呑み込めず固まっている。

『あんまり乱暴しやダメだよ』

「あれくらいいいだろ。無傷だし」

コンコン。ドアをノックする音が聞こえる。

ん？誰か来たのか？

「失礼します」

入ってきたのは、梨東だった。

2話 前編（後書き）

すみません。手が限界で凍傷になりそうなので、続きは仮眠を挟んだ2時ごろに書きます。少しお待ちください。

2話 後編（前書き）

書き直しががんばります！

2話 後編

「梨東か。何の用だ」

「リサちゃんのお漏らし対策グッズを…」

「あんたなつとうつていうの？」

「僕は梨東 一多喜ですよ」

柚木は梨東をジッと見る。

「なつとう…しらたき？」

「ちつ、違います！梨東 一多喜です！」

「なつとうしらたきにしかきこえないわ」

「うつ…僕は、」

梨東とクソガキはくだらない口喧嘩を始めた。それより…。

『アハハハハ！やっヤバい！笑い死ぬ！なつ、納豆しらたきつて！』

『クツクツ。面白いね。いいあだ名出来たじゃん。納豆君？』

この2人、凄くうるさい……。通信切つて笑えよ。

「060号さん…これ、置いておきますね…」

口喧嘩に負けた梨東は、明らかにテンションが下がっている。梨東も気になるが、今はこっちが大切だ。

さて、まずはこのオムツを穿かせてみるか。

「おい、これ穿いてみる」

「……いや」

「可愛い柄だぞ」

「こどもあつかいしないで。あんたがはけばいいじゃない」

「…分かったよ。後でどうなっても知らないからな！」

本当にム力つくクソガキだな！

『またこのパターンなの？』

「……」

その日の夜。 やっぱり、俺がなんとかしないとダメなのか？ベツドは2つあるが、桃谷と一緒に寝ろってうるさいからな…。

『ねえ、トイレ連れて行きなよ』

「…仕方ないな。おい、トイレ行くぞ」

「……」

また無視かよ…。

「怖いのか？」

「怖くないもん。だいじょうぶだもん。へいきだもん」

何かもんもんいつてるし…。

「一緒に行つてやるよ。ほら」

060号は手を差し出す。

「…」

戸惑いながら、柚木は黙って060号の手を握る。

「よつと」

「な、なにすんのよ」

060号はその手を引っ張り上げ、柚木を抱き抱えた。

「はなして！」

「子供は黙って大人に甘えていればいいんだよ」

「……バカ」

おつ、やっと大人しくなった。今の内だな。

2人は部屋を出て目の前の、幼児用トイレに入って行った。

数分後。

「060号、元気？」

廊下に突然桃谷が現れた。

「お前…桃谷か？」

「そう、190？の高身長で頭も良く、メガネがトレードマークでホモっぽいけど実はレス好きの28才、桃谷 やなぎとはボクの事さ！さあ、ボクにホレても…いいんだよ？」

「ホレるわけないだろ、お前のメガネ叩き割るぞ」

「ひどい」

クネクネと、桃谷は怪しい動きをする。

「そんな君にお知らせ。君の死刑執行日が10月31日に決まったよ」

「えっ？」

いい顔してるな。こんなにいい『驚き』の感情を見せてくれるなんて……やなぎ、ゾクゾクしちゃう？

「このプロジェクトはどうなる？」

「君の成績にもよるけど、10月31日まで。10月31日に……君が死ぬ？」

「そうか……」

ん？この表情……。普通死刑宣告されたら、『驚き』と『怒り』か、『驚き』と『軽蔑』。なのに060号は、『驚き』と……『悲しみ』か『悔しさ』。1番分らないのは、そこに『安堵』の感情も少し混ざっている事。

この表情は、死刑囚ではなく冤罪者によく表れるもの。060号は二セの殺人鬼なのか？

そして060号は、死にたがっているのだろうか？

「……人間って、仮面を被って生きているんだよ。『甘えたい気持ち』を隠すため、『意地』の仮面を被っている人、『不良』の自分を隠すため、『優等生』の仮面を被っている人、『悪人』の本性を隠すため、『善人』の仮面を被っている人。ボクも……仮面を被って本当の自分を隠している」

「何が言いたい」

「君はどんな仮面を被っているんだい？」

「……」

？『悲しみ』と『怯え』の表情？

「……俺は……」

ガチャ。柚木がトイレから出てきた。

「柚木、1人で出来たか？」

「むずかしかったけど、なんとかできた」

「そっか。じゃ、部屋に戻るか」

明らかに動揺している060号は、柚木を連れて部屋に戻って行った。

「フフフフフ？おもしろいな？もつとイジメたくなるううう
うあああ、ボクの仮面が剥がれそうだ？でもも、ダメだよなぎ
？ここで人を殺したら怒られちゃう？あの時みたいにな……」

「桃さん、こんな所にいたんですか。仕事してください」

桃谷の前に女性が現れた。

「やつほつほ　うつし　シスコンの君のお兄ちゃんはどこ行っ
たの？あと……ボクの話聞いてた？」

「私はうつしではなく、後　朝子あさこです。兄は今トイレです。あな
たの話は最後の方だけ聞きましたが……ここにいる人はほとんど何か
事件を起こしている人達なので、私は気にしません」

「君のお兄ちゃんも人殺しだもんね」

「……」

普段無表情のうつしも、これを言うと『悲しみ』と『後悔』が出る。本当に面白いな？

「桃さん、朝子に何しているんですか？」

「兄さん……私は何もされてないから、仕事に戻りましょう」

「……」

なつすんはボクに『怒り』と『嫉妬』の感情を向けて、仕事場に戻って行った。

「どんだん面白くなるな。とりあえず、もう1回060号の事調べよう　ボクの苦手なあの人都在这里に戻って来るまで……」

3話へ続く。

2話 後編（後書き）

初期設定より、だいぶやなぎのキャラが壊れて、どんどんド変態になっていく…。

後 朝子はアナグラムです。ひらがなにして並べ替えると…？

3話は伏線が入った本編のような番外編で、苺島メインになります。

では、次の更新をお待ちください。

3話 前編（前書き）

更新おそくなつてすみません。

そして、思ったより長くなったので、1回切っておきます。

話の内容により、次は中編になるかもしれません。

では、本編をどうぞ。

3話 前編

いつものように朝が来たが、あいつはまだ起きない。私は仕方なく、あいつをの部屋に行く。

「おい！いつまで寝てるんだ！リサはもう起きているんだ！だからお前も早く起きろ！要人！」

掛け布団を引っぺがして、無理矢理要人を起こした。要人は明らかに不機嫌そうだ。

「…もう少し寝かせてくれ」

「駄目だ、早く起きろ」

「……叶」

「何だ？」

「……………好きだよ」

要人の言葉に、私は顔が赤くな…。

「うわっ！」

ハッと目を覚まし、徐々に今の状況が解ってきた。

今は夢か…。なんてふしだらな夢を見たんだ私は…。

苺島は自分に、自己嫌悪する。

…ん？そういえば、今何時だ？時計時計… あった。

「……3時か」

今日の集合時間は5時だったな。用意時間を抜いて、1時間あるな。

…もう1回寝なおすか。

目覚ましのアラームをセットして、ふたたび布団の中に潜った。

「……叶、何をしているんだ？」

「とれーにんぐよ。わたしはしんだおかあさまのぶんまで、おとうさまをまもるの」

「そうか、ありがとう。叶」

父さんは私の頭を優しく撫でる。私は…父さんに褒められるのが好きだった。

「叶、恋とはふしだらな物だ。叶は恋をするな」

「はい、わかりました。かなはこいをしません」

父さんのいう事は絶対だった。

「どうして！？話が違っただろ！」

「そんな物はあの事件の証拠にはならない！」

きょうおとうさまは、おともたちとおはなしちゅう。でも、なんかケンカしている。わたしにもっとちからがあれば、このケンカをとめられるのかな？おとうさまはかなしまないのかな？わたしにもっとちからがあれば…。

「お父さま、はなしって何？」

「叶、これを持っていなさい」

お父さまからうけとった物は、きれいなピアス。

「叶が大人になったら付けなさい。そして…あいつに罪を認めさせてくれ…」

「お父さま…泣かないで。私、もっと強くなるから」

私はその日から、トレーニング量を倍に増やした。

でもある日、父さんは遺体となって帰ってきた。

「…お父様？」

「叶ちゃん」

「警察庁長官さん」

「言いくいんだが…君のお父さんはもう目を覚まさないんだ」

「…嘘」

「嘘じゃない」

「…」

「私だって、親友でも同僚でもあった君のお父さんが亡くなって悲しい。本当に…惜しい人を亡くした…」

「…嫌」

「叶ちゃんはもう身寄りはない。だから、私の養子にならないか？」

「嫌…嫌嫌嫌嫌嫌！」

「叶ちゃん…」

「私はお父さまのそばにずっといるの！」

「叶ちゃん！」

幼い頃の私は泣きながら家を飛び出し、少し遠い別邸の父さんの部屋に行く。

「……？何か物が少なくなっている気が…。気のせいかしら？」
まるで父さんの死を否定するかのように、必死で思いを探した。
そして見つけたのは、

『私はもうすぐ死ぬだろう。でも、これは私の力が足りないせい。
叶が悲しむことはない』

と書かれたメモ1枚。

「どうしよう…続きが破られている」
続きを探したが、見つからなかった。

しばらくして、私は疲れて眠ってしまい、気付けば警察庁長官さんの家だった。

ここでどんな会話をしたかを憶えていないが、私は警察庁長官さんの養子になった。

それから10年余りで、私は父さんと同じ警察になっていた。そして、父さんの墓に報告した時に決めた。

私は邪魔な胸などいらない。欲しいのはたくましい筋肉。

私は子供を作る部分などいらない。子供を作る事もなければ、恋人

を作るつもりもないからだ。

私はどうして力のない女に生まれたんだ？力のある男に生まれたかった。

そう、私が欲しいのは力。全てを守り、全てを壊し、全てを捻じ伏せ…そんな力が欲しいんだ…。どんな事をしてでも…！

そして私は父さんの墓の前で、足元まで伸びた長い髪を切り、女の自分を捨てた。

この誓いの日数年後、私は警視總監になり、警察庁長官様からある事を聞いた。

「君のお父さんを殺したのは知っているだろ」

「人物像が全く見えてこない事と、姿を全く見せない事からその名が付いた、インビジブルですね」

「そのインビジブルが、殺し屋集団の若きボスだと分かった。君のお父さんを殺したのは、インビジブルが雇った殺し屋だ」

「インビジブルは何故父を殺したんですか？」

警察庁長官様は少し黙った後、再び喋りだす。

「言いくいんだが…君のお父さんはある事件を起こし、人を殺した。その逆恨みだと、私は思う」

「じゃあ、その事件を調べれば、インビジブルの正体分かるんじゃないでしょうか？」

「それを私が今調べているんだ。君はこっちを頼む」

渡された資料には、危険区域のマークと、『インビジブル潜伏地』と言う文字が描かれていた。

「君は死ぬかもしれない」

「でも、やります！やらせてください！」

「…決意は本物のようだね。行っでおいで。 苺島 叶警視総監」
「はい！」

3話 前編（後書き）

キャラの過去が徐々に明らかになってきましたが、騙されないでください。

その過去や夢は本物ですか？二セの過去や夢もあるかもしれませんが、騙されないためのヒント、いくつか勘違いしているキャラがいます。それが誰か、何を勘違いしているか、考えてみてください。そして、過去と今が繋がっているのと、繋がっていないのがあります。それを見極めてください。

でも、本当の事もあったり、まだ謎が出ていない可能性もありますので、気を付けてください。

信じているから信じたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3188z/>

死刑囚子育てプロジェクト

2011年12月22日06時01分発行